

同志社大学 水曜チャペル・アワー「奨励」

信・望・愛——見えるものではなく、見えないものこそが大切

2007年7月4日（同志社大学）

奥田 昌道

見えないものこそが大切 イエス・キリストというお方 ヒルティの言葉

「だから、わたしたちは落胆しません。たとえわたしたちの「外なる人」は衰えていくとしても、わたしたちの「内なる人」は日々新たにされていきます。わたしたちの一時の軽い艱難は、比べものにならないほど重みのある永遠の栄光をもたらしてくれます。わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます。見えるものは過ぎ去りますが、見えないものは永遠に存続するからです。」（コリントの信徒への手紙二4・16～18）

「わたしたちは、今は、鏡におぼろに映ったものを見ている。だがそのときには、顔と顔を合わせて見ることになる。わたしは、今は一部しか知らなくとも、そのときには、はつきり知られているようにはつきり知ることになる。それゆえ、信仰と、希望と、愛、この三つは、いつまでも残る。その中でも大いなるものは、愛である。」（コリントの信徒への手紙一13・12～13）

●見えないものこそが大切

皆様、よくお集まりくださいました。この大学の中にチャペルがあつて、毎週、御言葉が語られることは実に素晴らしいことだと思います。私は初めてこのようなご奉仕をさせていただくことになったわけでございますけれども、ただ今から、日ごろ感じておりますところを皆様にお話し申しあげたいと思います。

さてタイトルは、共通テーマが

「人生において大切なこと」

そして私は今日のメッセージの題を

「信・望・愛——見えるものではなく、見えないものこそが大切」と掲げさせていただきました。聖句を読んでいただきましたように、

「私たちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぐ、見えるものは一時的であり、見えないものは永久に続くからである。いつまでも永続するものは信仰と希望と愛である。その中でも最も大いなるものは愛である。」

すばらしい御言葉です。聖書は私たちに見えるものを超えて見えない永遠の世界の消息を語り伝えてくれている書でございます。有限なる私たち一人ひとり、私たち人間でござい



ますが、有限なる世界、この世で見えるもののなかに生き、見えるものだけが實在だと考えてそのなかでだけ生きようといえます。

「見えないものなど存在するはずもない、そのようなものが存在すると信ずる根拠もない」

と一般に考えます。でも私たちは何かを信じなくては生きてはいけません。

いや、日々の生活はまだ見ていないこと、手にしていないことを信ずることによって成り立っています。人は明日という日は必ずやってくるかと信じています。それは自然界が自然法則にしたがって動いている、動いていくと信じているからです。また、友だちと明日どこどこで会おうねと約束したといたします。友だちも私も必ずその約束の場所と時刻に出かけ、そこで落ち合うことを信じて過ごしています。友だちは必ずやってくる。これも信ずるということです。友人の手柄を、言葉を信じているからです。

このように私たちの日常生活においてさえも、まだ見ていないこと、まだ手にしていないこと、それを現在すでに得たものとして生活が営まれています。見える私たちの世界さえこれから起こってくるであろうこと、確実なこと、あるいはまた不確実なこと、それを前提として私たちの生活空間は時間的・場所的な広がりの中で営まれています。それは自然法則の揺るぎないことを信じ、また人間相互に約束したことは必ず守るということを信じ、それを前提として営まれているからだと思います

今日、私が題に掲げました

「見えるものではなく、見えないものこそが大切」

という、見えないものとは、私たちの人間世界・自然界という見える世界ではなく、神の世界、見える世界とは別次元の神様の次元の世界のこととございます。それは人間の側からは手を伸ばしてつかまえることのできない世界、人間が主体となつてそれを客体化し、対象化し、あるいは客観化してつかまえることができない世界のことです。

何事におきましても、主体的であり、王様でありたいという人間にとりまして、このような人間のプライドを傷つけるような世界は、はなはだ厄介なこととございます。人間の側からつかまえることができない世界、その実在者、それをどうやって知ることができるのか。それは、その世界からの語りかけ、働きかけに耳を傾け、それに身を委ね、その方につかまえられる、つかまえることによつてのみ可能です。いわば主客の転倒でございます。その方が主体となり、こちらは客体となり、

「主よ、語りたまえ、僕、聞く」

という態度です。あるいはかつては天動説が信じられていました。地球が中心で太陽は地球の周りを回っている、天は地球を中心に動いているという考え方と、太陽の周りを地球が回っているのだという地動説という考え方（考え方ではなく、真実そのとおりになってしまつたわけですけども）、そのころは大論争がございました



このように我々は、こと神様のことに關しましては、天動説ではなく、地動説への大転換、神様が方が主役であつて、私たちは聞き手であり、語りかけを受けとり、そしてその言葉にしたがい、導きにしたがつて生きるという大転換が起らなければなりません。これが私たち自身の生き方、神様の世界、肉眼では見えない実在界を知る上で最も大切な第一歩でございます。

彼方の世界からの語りかけ、その実在性、もし「神」と呼ぶならば「神を知る」などということは、人間にとつて果たして可能なのでしょうか。それが間違いないと断言できる根拠はどこにあるのでしょうか。これは当然の問い掛けです。

ところで詩篇第19編に次のような詩があります。文語文でご紹介いたします。

「もろもろの天は神の栄光をあらわし、大空はその御手の業を示す。この日、言葉をかの日^ひに伝え、この夜、知識をか^みの夜に送る。語らず、言わず、その声聞こえざるに、その響きは全地にあまねく。その言葉は地の果てにまで及ぶ」

見えない世界を見、聞こえない声、聞こえない言葉を聞いている、不思議なすばらしい内容の詩だと思います。

●イエス・キリストというお方

さて福音書に描かれているイエス・キリストというお方、これは実に不思議なお方です。私たちからすればつかまえないところのない茫漠とした神様、その神様を「父よ」と、父と呼んでいらつしやる。「父よ」と親しく語りかけ、その父なる神の語りかけを百%聞き、その御声にしたがつてその御声のままに行動しておられる。これは全くの驚きであります。ヨハネ伝の中に次のような言葉があります。

「子は父のなしたもうことを見て行^なうほかは自ら何事をもなしえず、父のなしたもうことは子もまた同じくなすなり。父は子を愛して、そのなすところを悉く子に示し給^{ことごと}う。またさらに大いなるわざを示し給わん。汝らをしてあやしましめんためなり」

と。イエスという方は

「自分からは何もできない」

と言つておられる。

「自分は善でも何でもない。よき方は神様だけだ」

と言つておられる。なすべきことをお示しくださつて、それにしたがつてそのとおり行つている。己というものが全くない方なのです。これがまた驚きでございます。人間は自分が何者かでありたい。自分のなかを充実させて拡大して、そしてやがて天に達しようとする。ところがこの方は、

「自分は何もない。神様だけだ。神様が私のなかに入つてきて、これをするの



だよ、こうするのだよ、そのとおりにやっていく、これしか私の生きる道はない」

と、そうおっしゃっているのです。まあ、私は驚きます。

「我、自ら何事もなしあたわず、ただ聞くままに裁くなり」

「裁く」というのは判断するということですね。判断する。自分から何もできない。ただ聞くままに判断する。そして裁く。

「我が裁きは正し、それは我が意を求めずして、我を遣わし給いしものの御意を求むるによる」

と、このお方にとっては御意がすべてであって、自分ではない。我々人間は「自分、自分、自分」なのです。そこが全く対立関係にあります。大学というところも

「すべて疑ってかかりなさい。自分で判断しなさい。主体的に行動しなさい」

と言っている我々の教育と、キリストの生き方、

「主よ、あなたがすべてです。父よ、あなたの御意をなさしめてください。どうぞ私をおしてあなたの御意をこの地になしてください」

と。全く正反対の生き方ですね。

それからまた、サマリアの女との対話のところがありました。旅に疲れて真昼時、井戸端のところにお座りになったら、サマリアの女がやってきた。

「水を飲ませてちょうだい」

というところから話が始まりました。そのとき弟子たちは町へ食物を求めて行った。帰ってきましたら

「先生、食物を持ってきました」

「私にはあなたの方の知らない食物がある。私を遣わされた方の御意を行い、その御業をなし遂げる、これが私の食物だ」

とおっしゃった。疲れて水がほしい、おなかも減った、そういう状況のイエスが、サマリアの女と語らっているうちに神様の次元に入ってしまったわけて、

「神は霊なれば拝する者も霊とまことをもって拝すべし。あなた方はこの山で礼拝し、私たちはエルサレムで礼拝しているとあなたは言う。しかしこの山

でもあの山でもない、霊とまことをもって礼拝する。そういう時が来ている。

神様はそういう人を求めておられる」

ということをお話しになっていましたね。

そのように特にヨハネ伝などを通してイエスという方のお姿に触れますと、見かけは私たちと同じ人間の姿・形をなさっておりながら、その在り方、生き方、これが、こと神様との関係におきましては、私たちと全く異なります。これは感服するほかございません。そして



「父と我とは一つなり」

とおっしゃった。これにユダヤ人たちは怒ったのですね。神を冒瀆する言葉だと。ところがこのお方にとつては自分是从らつぽ、神様は全く充滿して百%。一つになつていらつしやる現実を語られただけ。

「この現実、これが私だよ」

と告白されただけ。そういう方でございますので、まさに見えない世界、神様という、とらえどころのないお方を百%、

「神様とはこんなお方だよ」

とお示し下さつてゐる。気づかずしてお示し下さつてゐるときえ思います。そういう意味でまことに「父と我とは一つなり」という言葉がふさわしいお方です。

このように見えない神様、私たちの側から知りえない神様、その実在性、その本質、すなわち義であり、愛であり、聖である。また光であり、命であり給う、そういう神様を我々に見える方を通して表して下さつてゐる、これが神様の御意であつた。

イエスという方は、いつも神様のことを、

「私を遣わしてくださつたお方だ。自分は遣わされて、この地上にやつてきた」と。そういうふうになつてゐるお方ですね。ヨハネ伝の中で

「私が地上のことを語つてさへあなた方が信じてくれないのなら、天上のことを語つて、どうして信じてもらえるだろうか」

ということも言つておられます。しかしながらまさに愛そのものの、光であり、命であり、義であり、聖である、そういう我々が慕つてやまない、そういうものがそこにありました。そしてそのお方は

「私を信ずるものは永遠の命をもつ。私が与える水を飲むものは永遠に渇くことがない」

と言われました。また

「生かすものは霊である。肉は何の役にもたたない。私が語つた言葉は霊であり、命である」

と語つておられます。

ここで言う「霊」というのは、見えない次元、見えない世界の事柄、我々も霊的な存在です。神様も霊です。しかしその霊というのは、手でつかまえたり、認識できるものではありません。「生かすものは霊なり」、この霊は神中心の生き方を表しています。

「肉」は、私たちの生まれながらの人間性、これは自己中心で、自我にとらわれて、何でも己、神様さえも自分の僕にしたがるような、そういうのが我々の人間性ですね。これじゃ、どうにもならないよ、と。「生かすものは霊」という在り方、肉は何の役にもたたない。

「私の語つた言葉は霊であり、命である」



と。それからニコデモとの会話のなかで

「人新たに生まれずば、神の国を見ることあたわず。肉によりて生まるるものは肉なり、霊によりて生まるるものは霊なり」

と言っておられる。

「全く見えない世界、別次元の世界から、神様の側から私たちは新しく生んでもらわなければ、その見えない世界、別次元の永遠の命の世界には入っていけないのだ」

という。こちらから到達できるものではない、向こうから語りかけ、つかみかかり、我々のなかに宿っていただき、そして一つになっていただく。これで初めて向こうの世界を今、この地上で現実として生きていくことができる。

だから私は、イエス・キリストという方は本当にありがたいお方だと思っています。己のために何も求めておられない。ただ父の御意を行う。御意は何か。私たちに永遠の命を与える。

「この地上だけの命で死んでいくような、消えていくような、そんな安っぽい存在ではないよ、皆さんは。あなた方は神様に愛されている、神様の命を命として生きる、そういう尊い存在だよ」

と我々に語り伝えるために地上に現れてくださった。そうとしか思えない。ご自分のためには何ひとつ求めなかった。あの十字架の上でさえ

「彼らを許してやってください。彼らは何をしているかわからないからです」

と。そうやって祈ってくださった。

まあ、私はこのお方において感心しますのは、言葉と姿、また行動が、ピタッと一つであるということです。

「敵を愛せよ」

なんてできることではない。あの十字架の上で

「彼らを赦してやってください」

と言って祈っておられる姿、これにはもう本当に参ります。少なくとも私のなかにはそういう愛はありません。どんなにひっくり返っても、それは出てこない。これは主イエス・キリストが聖霊というお姿で私のなかに宿って、

「肉なるお前を霊なるお前に化してあげるから心配するな。肉なるお前はもう十字架で片づけたから、霊なる私、復活して今も生きている霊なる私は、お前のなか

に宿ってお前を変質・変貌させてやるから、お前と私は一つだよ」

と今度は言うてくださる、それに私は望みを託しています。これが希望なのです。自分からは出てこない。

私は今から50年前にイエス・キリストという、そのような大転換を与えてくださった方を知ったんです。1956年7月7日、土曜日の晩でした。その翌日の日曜日に嬉々とし



てそれを伝えてくれた方の集会に行きました。ちょうど今年は7月7日が土曜日、7月8日が日曜日、だから私にとってはずばらしい時期だなと思っています。

それはそれといたしまして、聖書というものは見えない世界、永遠の世界の消息を向こうの方から私たちに語りかけ、命を与えようとしている神様の語りかけ、愛の書でございませう。とりわけ新約聖書はそういう書だと思っています。いわゆる言語としての言葉の制約にとらわれることなく、永遠の世界からの愛の語りかけ、霊なる言葉として私たちが受ける。時代を超え、所を超え、変わらないものの、本質的なもの、これを身体で受けとる、それを我々の血肉とする。それを糧として生きていく。それが人間としての本当のあり方ではないか。民族とか、時代とか、それは永遠の悠久の世界から見て、宇宙から見て、まことに小さなものです。しかしこの小さな、小さな地球の一角にイエスという方が現れてくださった。しかもご自分で出てきたのではない、

「私を遣わされたお方」

と神様を呼んでおられる。そして神の姿を表してください。と。

だから私はもう、イエスという方に出会って、そして自分が変えられていって、まことに私は幸いであつたと感じております。

「信仰とは望むところを確信し、見えぬものをまこととするなり」

と。世界というものは見えるものからではなく、見えないものからつくられた。そういうこともヘブル書11章に書かれております。

さてここで皆様に資料を用意いたしました。『法学セミナー』という雑誌に書きました、「樹木と幹と根」という文章です。私たちは樹木を見ますとき、地上に見えている枝ぶりのすばらしさを見ています。ところがそのすばらしい樹木を支えているのは、実は見えない根っこなのですね。根っこがしっかりといてないと樹木は何百年も生育しない。

いわば地上の見えている姿が我々人間の営みです。文化の世界です。ところが文化の世界を支えているのは見えない根っここの世界である。このことを私の信仰の恩師が教えてくださった。そこで私の学問の上での悩みが解けてきた。そういう告白を、この『法学セミナー』

の文章に書いておりますので、後ほどごらんくださればありがたいと思います。恩師は「キリスト教という宗教を信ずるのじゃない。キリストという霊的人格に帰依し、祈り入り、己の主観を去って、真理そのものであり給うキリストの光で曇りなき目でものを見ることだ」

と、このように教えてくださったのであります。

●ヒルティの言葉

カール・ヒルティ。これは私より年代の古い方たちの愛読書でもあったようですが、日本では『眠られぬ夜のために』『幸福論』という著作で知られている人です。そのヒルティ



の生涯を簡単にスケッチしています。ヒルティは私がこの世に生まれる99年7か月前に地上に生まれた方です。私は1932年9月28日に生まれましたので、99年7か月先にスイスの地に生まれました。ところが私は、ヒルティのものを讀みますと大変な共感を覚えるのです。この方が法学者であつたこともありまされども、何かしら内的に通じるものを感じまして大好きなのです。ヒルティという方は、14歳でお母さんを亡くし、25歳のときにお父さんを亡くしている。30歳くらいのときに回心が訪れたようです。

そういうヒルティの『幸福論』、昔、白水社から出ました本から今日の主題にかかわりのありそうなところを抜粋いたしました。1899年、ヒルティ66歳のときの作品から抜粋しました。その大事なところを拾い讀みして終わりたいと思います。

《今日におけるすべての宗教的ないしは哲學的問題の核心は、眼に見える世界のほかに見えない世界を信ずるか否かの單純な問である。なぜならば、學問的に認識するという意味でそれを知ることが決してできないからである。神學は、ただ學問としてだけ考えれば、本來實を結ばない學問である。他の學問的知識と同様の意味での神についての「知識」は、存在しない。

もしその世界を信じなければ、多くの知恵と努力によつて、しかしまた他人に対する多くの恐怖と苛酷をもつて、眞の終局目的を持たない人生を突き進むことを試みなければならぬ。

それに反して、信じた場合には、すでにこの地上で自分の存在の一部がよりすぐれた世界秩序のなかに生き、そして一切の不完全さを耐え忍ぶことを学ぶ。それは、この眼に見えない世界によつて困難のなかに絶えず支えられ、その世界から来る力をすでにいま、いよいよはつきりと経験するからである。

キリスト教の端的な意味は、ヨハネによる福音書1章9～12節ですでに表明されたところのことに他ならない。すなわち、この世を超えた世界の消息を伝えるこの上なく完全な光が、ひとたび歴史的實事としてこの世にやつて来たということである。この光を直接に、またそれ以後は傳承を通じて受け入れた人々は、他の人々が見出しえない高次の、また喜ばしい生命の力を得る。しかし、この光を自分の生活の中に受け入れるか否かは、すべての人の完全な自由選択にゆだねられている。

人がみずから光を受け入れないならば、人生の倫理的要求や課題に應ずる眞の力を得られず、また眞の喜ばしさも持ちえない。

神を信じ、キリストを信じ、眼に見える世界とその秩序のほかに存在する、眼に見えない世界とその秩序を信ずる信仰は、最初は常に決意である。或る人々の場合には、絶望的行為ですらある。もしそのような驚くべき世界の眞実性と必然性を哲學的に納得するまで待とうとするならば、信仰には決して到達しない。

もしも神様がいらつしやらない世界、この地球というものが偶然に今のような状態



になってきたとしたならば、それらは人間のよさに精神的に高い才能を賦与された存在が、根本的に無意味な時間の間の生存を営むためにのみ創られ、そのちは容赦なく永遠の無のなかに沈んでしまわねばならないといふことの不合理さ、あるいは、何十億もの理性を持った存在が、一瞬の喜びさえも味わわずに、悲しく滅びていった、このような世界の腹立たしさは》

と言っています。どうしても神様の世界、それがなければやりきれないではないかと。当時は唯物史観が頭をもたげてきて、それが人の心をとらえた時代だったのです。それをここで言っているわけです。

それから青年諸君に対して次の言葉があります。

《絶え間のない平和と安息を決して当てにしてはならない。それは諸君の生き方の性質でも、定めでもない。むしろその使命を断固として受けとるがよい。もし諸君がこの世で恵まれた生活を見いだすならば（たしかにこの世の霊は、もし諸君がいまでもなお立ち戻って、この霊を自分の主と認めようとすれば、それを簡単に約束してくれるであろう）、そのために真の永遠の生命を失うことは確実である。しかしもし諸君が眼に見えないものを信じ、またこの指示を信じて、多くの眼に見えるものを勇ましく放棄するならば（己に死に、神様によって生かされていく死生の転換）、そして人間がその生涯でなしうるこの最大の踏切りを、日々また機会あるごとに冷静な決意をもって新しくするならば、そのために必要な力を受けるばかりでなくて、諸君が放棄したすべてのものを百倍にして返していただだけ、しかもその上に永遠の生命を得るであろう。これによって、またこれによってのみ、諸君の人生は、およそほんとうの内容と永続的な価値を持ったのである。》

朝もしくは夜半に目覚めるとき、最初に神のことを思うならば、その人生は勝利である。また神のことを夢に見はじめるとすれば、それは勝利以上のものである。

現代で神を信ずるのは、神を愛し、また神の愛を実感する人だけである。これだけは錯覚でありえず、またおよそ地上に存在するすべてのもののうちで最も確実でさえある。もし自分が神の霊そのものによって促されて、誠実に「主よ、私はあなたを何ものにもまさって愛します」と言える日が訪れるならば、自分の人生の目的は達せられたのであり、どんな永遠もこれよりまさったものを与えることはできないであろう。この時に「神がともにい給うこと」が実現する。》

ヒルティは「幸せとは何か」ということを

《神にあってなす有益な仕事、それは神がともにい給うこと、この二つが結合している姿、これが最も人生で幸福と呼ぶべきである。二つの結合が完全であればあるほど、善は増大していく》

と、また別のところで言っています。



《神の意志に従った行為の最も明白な結果は、いつでもそこから生ずる喜ばしさである。それはしばしば単なる神経の興奮にすぎない騒々しい陽気さではなく、静かで明朗な快活さと生気に溢れた喜ばしさであり、しかもそれが例外としてではなく、つねの状態として存在する。まさにそれこそ人の心が本来最も強く憧れ、もし一度それを実感し、のちにまた失ってしまった場合には、その喪失の痛手を最も烈しく感ずる境地である。》

私がヒルティにひかれますのは、彼は生活のなかから語ってくれているからです。私も生活者としてこの地上のなかで法科大学院、かつては法学部、そこでいろいろと苦労に苦労を重ねながら神様とともに歩こうとし、歩んできた、私のキリストに出会ってから50年の生涯であつたわけです。もしもこのお方に出会っていなかったら私の今日は絶対ありえない。地上に、もういなくなつたと思っています。

以上で私のすすめの言葉を終わることにいたします。ありがとうございました。

（2007年7月4日 同志社大学 水曜チャペル・アワー「奨励」より転載）

